



# 工業標準設定方法の研究

## Research of Establishment Methods for the Industry Standard

矢野 宏\*

Hiroshi Yano

鴨下 隆志\*

Takashi Kamoshita

### 1. 技術者の自立として一測定値を考えるー

#### 1.1 社会の諸活動の様相

標準設定の研究を行った経緯を追っているプロセスを通して、それが技術者として自立する過程であったことが分かって来た。まずその導入部から始める。『なぜ日本は没落するか』を書いた森嶋通夫は、パレートの人間の基本要素の考え方として、以下のことを紹介している<sup>1)</sup>。

- (1) 新しい組合せを見つけだそうとする意欲
- (2) 個人よりも全体を優先させようとする傾向
- (3) 自分の感情を行動で外に向かって表現したがる傾向
- (4) 社交性の傾向
- (5) 自分の身と財産を保全しようとする傾向
- (6) セックスすなわち種の保全欲

ここで(1)は「イノベーションを成し遂げようとする本能的なし意欲」として品質工学に深く関係する。(2)は技術者の倫理的な問題である。(3)は積極的な行動として、森嶋は教育の歴史的な役割を重視し、さらに社会が時代的に共有したものの個人に残す心理的なものの影響を考えて、現在の青少年の50年後を予測する方法を提案し、「日本は没落する」としている。品質工学のこれからの変化を見る上だけでなく、社会変化の予測方法として参考になる。(5)、(6)はまさに現在の社会的な状況を反映している。

(1)と関連させてわれわれの研究活動状況を見ると、研究課題を研究はするが、研究の本来の目的を達成することを、研究者自身が追求する力は極めて

弱い。研究を成立させているものは、まず研究プロジェクトの立ち上げであり、次が研究の本体で、最後が研究の成果を生かすことである。しかし、プロジェクトを立ち上げた主体が、いわゆる研究課題は解決するが、研究の目的を達成するまでの諸活動を行うことはなく、研究成果の活用は、重要な課題としては顧みられず、推進の在り方を研究対象とするようなことは少ない。いわゆる研究の成果が生かされないというのは、まさにこの問題であると考えられる。

さらに、「技術と経済」の2012年第2巻540号の「震災後の日本型新社会モデルを探る」で、モルガン・スタンレー MUFG 証券(株)経済調査部長ロバート・フェルドマンは以下のように語った<sup>2)</sup>。「日本には既得権益があるが、なぜ既得権益が発生するか。…監督体制が経済学的事実、特に技術環境と離れてしまうということがポイントである。…比較的小さな技術がもうできている。しかし、監督制度は古い産業構造のままである。監督の制度と技術あるいは知識の状況にズレがある時、自分が今の特権を譲りたくないという、『しがらみ』が発生する。金融も人もいろいろな分野の監督制度を技術と一緒に考え直していく必要がある」。これは重要な指摘である。(2)の全体を優先するのと、(5)の身の保全の傾向とは相反する。しかし、それは社会の実相であるから、その事実の上に立って、いかなる行動をとるかが課題であろう。さらに折角新しい技術の芽が生まれたのに、それを知らずに現状維持に走る。ここでマネジメントと技術の間の乖離が生じる。結局、経験的には何らかの目的を達成するために、組織ではなく、「しがらみ」を断ち切ろうとする、組織の中の個人的な意欲が重要ということになる。

\* 応用計測研究所(株)、正会員